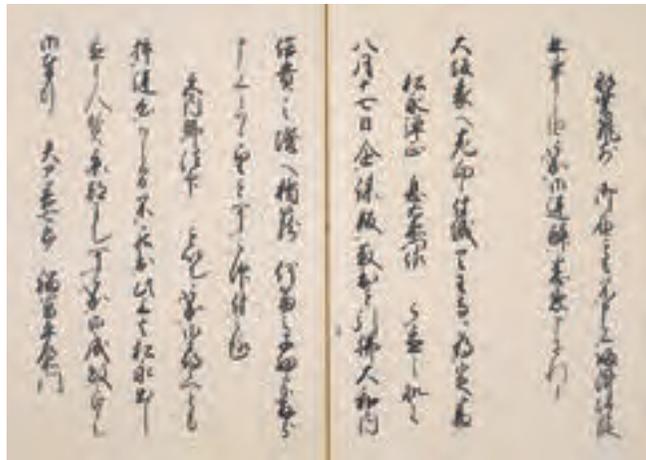


織田信長の南加賀進攻



織田信長画像(神戸市立博物館所蔵)

「天下布武」を掲げて全国制覇をめざす織田信長の軍勢は、天正三年(一五七五)八月、朝倉義景没後一向一揆の勢力下にあった越前へ進攻した。これに対し一揆勢は、武生円強寺や若林長門を中心として激しく抵抗したが、羽柴秀吉らの猛攻によって敗北し、一



「信長公記」巻10 天正5年8月8日の記事(京都市 陽明文庫所蔵)

揆勢は多数討ち取られた。前田利家の一揆勢処刑の様が瓦に刻まれたのは、この時の戦いであった。この攻勢によって、加賀江沼・能美

両郡までが信長軍の手に掌握され、越前北庄城は柴田勝家に任せられ、目付として、不破光治、佐々成政、前田利家が府中周辺二郡一〇万石に付けられた。



上杉謙信画像(米沢市上杉博物館所蔵)



柴田勝家画像(柴田勝次郎氏所蔵/福井市立郷土歴史博物館保管)

この敗色に、一向一揆は西上をねらう上杉謙信と手を結び、能登を征圧した。上杉謙信は、北加賀の一揆勢を味方に、松任城に陣を敷き、織田軍の進攻に備えた。天正五年(一五七七)八月、信長軍は、長連龍の援軍要請もあって、柴田勝家を大将として、丹羽長秀・羽柴秀吉・滝川一益・前田利家らが小松、本折・安宅を攻略し、手取川を越え、富樫に進攻した。しかし、九月十五日の七尾城落城の報に、羽柴秀吉は早々に撤退した。他の部隊も二十三日一斉に撤退しようとしたところ、上杉謙信の追撃を受け、増水していた手取川に流され、大敗を喫した。

その後、長連龍は能登において、手勢を集めて抵抗戦を繰り広げたが、そうした中、上杉謙信が病死した。中国攻めにかかっていた織田勢は、天正八年加賀・能登攻略に本格的に乗り出してきた。その背景には、本願寺顕如の信長との勅命講和による一揆勢の弱体化があった。この時、加賀は佐久間盛政が海岸線に沿って進攻し、金沢御堂



信長勢と上杉謙信との合戦の舞台となった手取川河口付近

を落とした。また、谷峠からは、柴田勝安が進攻し、手取谷の山内衆を殲滅した。一部には、教如の徹底抗戦の檄に従って抵抗するものもいたが、多勢に無勢であった。信長勢はさらに能登にも進攻し、上杉方に付いた畠山氏旧臣の降を入れ、能登をも掌握し、越中の平定とも合わせて、北陸は信長軍の掌握する地となった。(見瀬和雄)